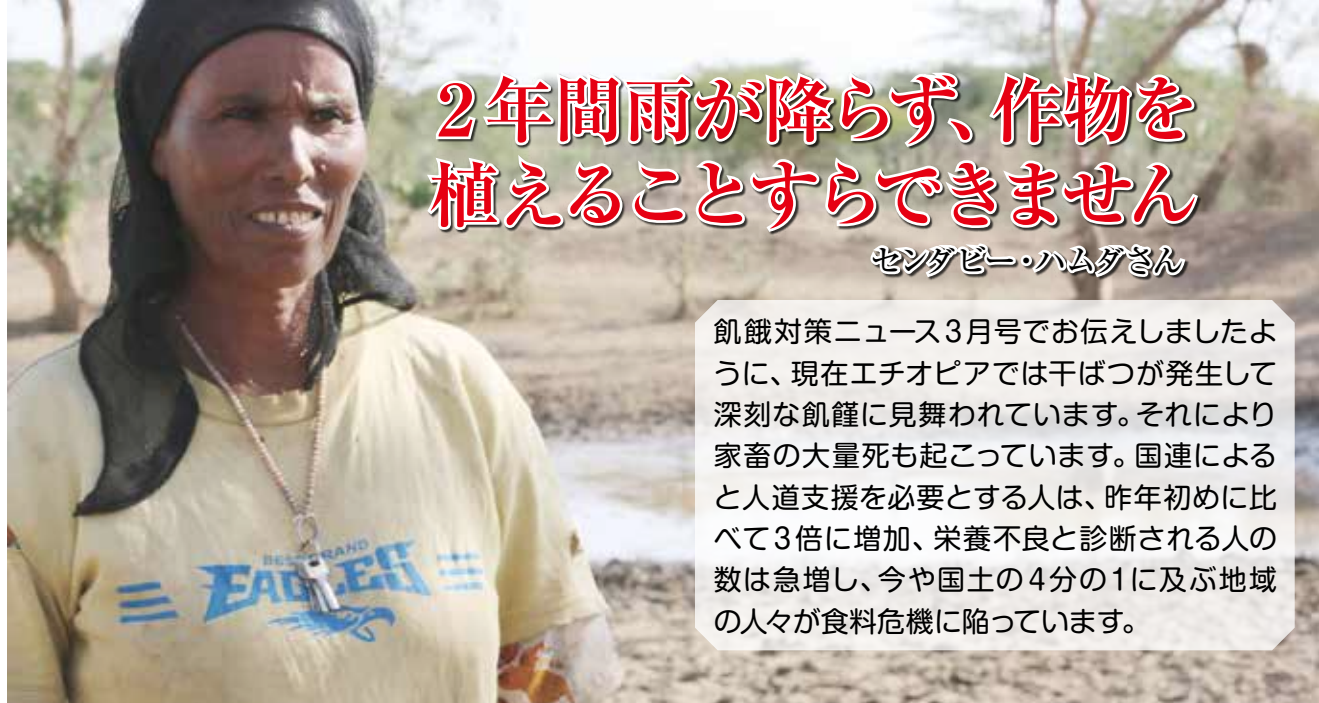




2年間雨が降らず、作物を植えることすらできません

センダビー・ハムダさん

飢餓対策ニュース3月号でお伝えしましたように、現在エチオピアでは干ばつが発生して深刻な飢饉に見舞われています。それにより家畜の大量死も起こっています。国連によると人道支援を必要とする人は、昨年初めに比べて3倍に増加、栄養不良と診断される人の数は急増し、今や国土の4分の1に及ぶ地域の人々が食料危機に陥っています。

特にオロミヤ州は干ばつ被害が深刻で、人口26万4千人のうち半数の13万人が、緊急に食料と水の援助を必要としています

オロミヤ州エレラン・アバブ村に住むセンダビー・ハムダさん(写真⑤55歳)には、7人の子どものいます。主な収入源は家畜と農作物です。センダビーさんは厳しい現状を次のように語ってくれました。

「ここ2年間、雨が降らない状況が続いていて、作物が育ちません。特に去年は1年間に数回降っただけでした。私は山羊4頭、牛3頭を飼っていましたが、山羊も牛も若い雌牛も干ばつによる病気で失いました。村の池は干上がって村には水源がなくなりました。家畜に水を飲ませるために数時間歩いてジーウェイ湖まで行かなければなりません。また私たちの飲み水も3時間以上歩かなければ手に入らなくなりました。」

同じ村に住むアマン・ワクオヤさん(30歳)は農家でしたが、彼



水運びのために学校に行けない子どもたちもいます

の畑も干ばつのため作物はほとんどできませんでした。「村の井戸の水はなくなり、ポンプは数ヵ月前から動かなくなっています。しかたなく数時間歩いて、更には長蛇の列に並んでタンクに入った水を買っています。村の人たちは、子どもに食べさせるために家族と共に村を出て町に行き、新しい仕事を探し始めました。多くの家族がこの村を去りました。」

フィタル・ボルさん(25歳、3児の母:写真⑥)はオロミヤ州ドグダ郡ウォヨ村に住んでいて、農地を持っていません。狭い土地なので雨が降っても家族5人の食料に十分な



ほどの収穫はありません。そこで他の農家からも農地を借りていました。しかし2年間雨が降っていないので、今は作物を収穫するどころか植えることも出来ません。そのために一家は政府やFHエチオピアなどの食糧支援に頼らざるを得ない状況です。

フィタルさんは「市場で穀物を買うために、飼っていた鶏、羊、ヤ

ギを全部売ってしまって、手元にはもう何も残っていません。先月は政府から食糧をもらい、今はFHからトウモロコシや豆類、料理油を支給してもらっています」

3万人余に1日10ℓ水を供給

皆さまのご支援により日本国際飢餓対策機構は、FHエチオピアと協力してオロミヤ州の3万人余に1人1日10リットルの水を7台のトラックを使って供給する計画です。また、すでに干上がってしまった井戸など4つの水源から水を手に入れることができるよう、給水能力の回復をはかる予定です。これにより2万人がその恩恵を受けることができるようになります。

これらの支援を確実に実行できますよう皆さまのさらなるご支援をよろしくお願いいたします。

エチオピア 緊急援助募金

募金目標300万円

募金は、郵便振替00170-9-68590 日本国際飢餓対策機構※記入欄に「エチオピア緊急援助」と明記。ウェブサイトからはクレジットカードもご利用になれます。お問い合わせは大阪事務所まで。

フィリピン最大の漁港を持つナボタス市は、マニラ空港から約20km北西に位置します。フィリピン飢餓対策機構(FHフィリピン)は、度重なる洪水被害に苦しむこの町の方たちと共に歩み、支援を続けてきました。2016年2月26日～3月7日まで、このナボタス市及びサン・ロケ地域で福岡市の西南学院大学の学生たちがワークキャンプを行いました。

西南学院大学
フィリピン
ワークキャンプ



感謝を忘れず分かち合える豊かさ

この地域で西南学院大学のワークキャンプチームを受け入れるのは初めてということでしたが、FHフィリピンのスタッフや食事など身の回りのお世話を下さった地元協力教会の皆さまも、温かく受け入れてくださいました。この教会ではFHの支援が始まる前から独自にスラムの支援をしておられたとのこと。学生17名と教員2名、JIFHスタッフ1名の19名でタンザ小学校、高校の訪問、またタンザ地区、サン・ロケの家庭訪問、台風被害を受けた家屋修理やプロ島の砂浜清掃作業のお手伝いをさせて頂きました。



砂浜清掃や台風被災者の家屋修理のお手伝い(タンザ地区)

FHフィリピンの里子の家庭を訪問した学生の声

「悪臭のする薄暗い路地の奥にある薄暗い家にまず衝撃を受けた。子ども3人のうち1人を内臓疾患で天国に送り、1人は心臓病で満腹に学校にいけないという環境にある家庭だったが、私たちに精一杯の昼食を出してくださり、温かくもてなしをして下さった。おいしいと喜んで食べると、夜には泊まっている所にまでご飯を届けてくださる姿を見て、「持っているのに分けない私たち」と「少ない中でも分かち合う姿」が浮き彫りにされた気がした。また、どんなにつらくても神さまに感謝している、と涙する姿が印象に残っている。それと同時に、内臓疾患や心臓病は他の家庭でも聞かれたため、これは栄養の問題なのではな

いかと思った」

「…生活が苦しいにもかかわらず『私は幸せだ』と言い切るお母さんが印象に残り、自分が持っている不満を恥ずかしいと感じた。『貧しいから苦しくて可哀想』ではなく、そのつらさを味わいつつも私たちに笑いかけ、神さまに感謝している姿にどちらが豊かなのかを考えさせられた。」

FHフィリピンのスタッフから

日本語で

日本のチームを受け入れるのは初めてで不安を感じていましたが、こんなにも私たちとコミュニケーションをとり、気にかけてくれたチームは今までありませんでした。本当に出会えてよかったです。日本に帰っても、このフィリピンでの事を忘れず、現実を伝えていってほしい。行動を起こしてほしいと思います。

(報告:現地同行/木村カナ)



ネパール大地震被災者復興支援・こころのケア

子どもたちが希望をもって輝けるように

日本国際飢餓対策機構 親善大使 森 祐理 (福音歌手)

サヴァイライ・ナマステ! (皆様こんにちは!)

2月10日～18日、ネパール大地震被災者支援コンサートツアーは特別な恵みの旅となりました!日本からタイのバンコクで乗り継ぎ14時間、フラフラで到着したカトマンズは、息ができない程の土埃と喧騒の街でした。ネパールは国家規模での電力不足で、1日13時間以上の計画停電。信号があっても使えないので、車とバイクが暴走していますが、あまり事故が起きないのが不思議でした。ガソリンもインドからの輸入制限のために不足していて、1000台以上のバイクや車が列を作って、1日～3日間もガソリンを買う為に並んでい

ます。とにかくネパールは驚きの連続でした。

今回は、日本と韓国の飢餓対策機構の支援を得て、「Janajagriti」「Ever vision school」「New Horizon Academy」の3校でコンサートをさせて頂きました。どの学校も、幼稚園から高校生までと一緒に学んでいて、各校800人位の生徒さん達が大喜びで迎えてくれました。

覚えてたのネパール語で歌い出すと、すぐに子どもたちも歌い始めます。現地でKFHIが良き支援をされていて、ワーシップソングも喜んで歌う子どもたちの姿に、私の方が感動しました。歌の後、一人ひとりに鉛筆のプレゼントを

手渡すと、目を輝かせながら大切に受け取る子どもたち。心から来て良かった!そう思いました。

復興にほど遠い現実...

あの大地震では、子どもたちも色々な傷を受けたと思います。手遊びの後、私が地震で弟を失った話をし始めると、急に真剣になった子どもたちの表情を見て、まだ心の傷は残っているのだと感じました。

現地の韓国人教会の礼拝にて賛美を捧げた後、世界遺産である「バクタプル」という街を視察しました。地震で甚大な被害を受け、多くの方が亡くなった地で、元々レンガ造りの建物が多いので、レンガが山のように散乱しています。傾いた建物は、棒で支えているのですが、かえって危ないように思いました。鉄筋もセメントも使わず、泥でレンガを積んで建て直しているので、もっと専門的な支援があればと思います。テントのような仮設住宅もありましたが、家を再建できる経済力のある方は、ほとんどいないそうです。復興に程遠い現実を目の当た



Janajagritiでのコンサート

森さんの両隣がKFHIスタッフ。㊦は岡マネージャー㊦は吉田

崩れたままの世界遺産「バクタプル」

韓国FHIとともに支援を継続、応援をお願いいたします



ネパールは2015年4月25日の大地震と余震の影響で大きな被害を受けましたが、復興支援は思うように進んでいないのが現状です。その理由の1つは政情が不安定なことです。震災後、9月にネパール人にとって待望の新しい憲法が制定されました。しかし、そのことを良く思わないインド国境沿いの住民による権利拡大をもとめた抗議活動が起こり、ネパール政府治安部隊との衝突に発展して、住民に死傷者も出ました。そのため昨年10月以降、インドとの国境が封鎖

されてガソリンやガスが一切ネパールに入っていない状況が続きました。物価が上昇し、震災被害を受けた方々に追い打ちをかけるような事態となっています。JIFHは現地で15年以上にわたってネパールで支援活動をしてきたKFHIと協力しながら、食料、衣類、建築資材の支援などをさせて頂きました。最も被害の大きかったシンドゥパルチョコのパデガウンにある学校では、勉強机と椅子が震災によって壊れたために足らなくなり、埃りっぼい地べたに座って勉強をしなければならない子どもたちもいます。またダディンのマハディベシ地域では安全な水へのアクセスができず、下痢や感染症などの二次被害の危険性が広がっています。

このような状況を打開すべく、今後もKFHIと協力しながら、被災された方々の復興のお手伝いをさせていただきます。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。(報告:現地同行/吉田知基)



JIFHからの支援の上着を着る子どもたち

募金の際は、郵便振替「ネパール大地震支援」、もしくはウェブサイトからはクレジットカードがご利用になれます



学用品プレゼント (Janajagriti)

New Horizon Academyの生徒 (800人) の前で歌う森さん



シーサイドバイブルチャーチ
グレース宣教会

つばめさわ教会



東北大地震から5年、被災地支援の一環として韓国FHIとJIFHの協力と仙台の皆さんの熱意によって建設されていたキリスト教会が仙台市宮城野区燕沢に完成しました。

お年寄りから子どもまで集える“地域の憩いの場”

JIFH東北事務所の伊東がお話を伺いました。

Q震災後5年経ちましたが

この間私たちが何をしたいかではなく、神様の手に導かれいろいろな人たちを通して支えられ、ここまで来たことを感謝しています。苦しいこともありましたが、一つ一つ脱出の道が備えられていました。

Q震災を通して見つけたものは

教会、地域、いろいろな団体、世界中の人とつながりです。これは私たちの財産です。また被災された方々に神様の愛をあらわすという点で、さまざまな教会が一つに



3月の建物完成披露コンサートでは森親善大使が招かれ、近隣の仮設住宅などから70名が来会されました。

なりましたが、その力の大きさに驚いています。ボランティアの人たちの心からの愛を感じ、この人たちの持っているものは何か知りたいたと8人の方が、聖書に導かれました。

Q地元の方が早速来られたとか

教会堂は韓国の方の設計ですが、力強い風格があって、見てい

るだけで力をもらえるデザイン、まさに希望のシンボルにふさわしい建物です。十字架をつけたら、早速近所の方が主人と家族のために祈りに来てくださ



内藤智裕牧師

「初めまして。私はこの度当地においてキリスト教会を始めさせていただく、つばめさわ教会の牧師・内藤と申します。5年前3月11日の大震災のとき、宮城野区蒲生にあった私たちの教会（旧称シーサイドバイブルチャペル）は、大津波の直撃を受けました。その後、元喫茶店だった建物をお借りして活動を継続していましたが、2月に燕沢2丁目の当地に会堂が完成しました。地域の皆様の憩いと安らぎの場所として、お気軽においでいただけたらと願っております」

（近隣の方々へのごあいさつより抜粋）

とかけこんでられました。これから森祐理さんのコンサート（3月12日）や子どもイースター（3月27日）がありますが、楽しみです。

※注これらはすでに終了しています。

Qこれからの役割について

支援をしてくださった方に感謝するとともに、その期待に添ったはたらきをしたいと願います。地域の人たちにとって、ここが天国の門として用いられる場所になればいい。それにはまず憩いの場所となって欲しいです。震災によって私たちが受けた訓練が、今後に活かされていけばと思います。子どもからお年寄りまで教会が建ったことをよろこんでいただきたいのです。



今年2月の建物完成後、最初の日曜礼拝で

▶教会への応援は直接お問合せください。宮城県仙台市宮城野区燕沢2-10-68 Tel.022(762)9229 <http://seasidebc.com>



募金活動に取り組んだ6年生の皆さん、この春に卒業されました

昨年10月27日、茨木市立中津小学校で出前授業を行いました。『知ろう！考えよう！つなげよう！この場所から出来ること』というテーマの下、6年生が世界の現状、特に自分たちと同じような年齢の世界の子どもたちの置かれている現状を学ぶ、という授業でした。

開発途上国の子どもの現状と「アンパンマン」を通して、自己犠牲についてお話をさせていただきました。生徒さんたちは、自己犠牲とはどうする事なのか、子どもに出来ることは、と一生懸命考えて、「飢餓と貧困に苦しむ人々のために、何かをしたい!」という思いを持ってくれました。

そして、どうしたら自分たちで沢山の募金を集めることができるかを各クラスで話し合い、出てきたアイデアを6年生全員で考えて、古着や古本、書き損じハガキを換金する方法を採用。さらに募金を



生徒代表から募金を受け取る吉本

呼び掛けて合計42,788円を集めてくれたのです。担当の先生は「6年生103名全員が企画や運営など何かの役割を担い、1年生から5年生にしっかりと趣旨を説明することから、換金する所まで責任を持って頑張ってくれました。保護者の皆さんの力強い協力も得られてここまで来ることができました」と話してくださいました。6年生のある男の子は、「中津小学校の全員が“かわいそう”という目的ではなく、“助けたい”という目的で協力できたことが嬉しかった」と話してくれました。

“自分たちにもできた”

2016年2月23日、再び中津小学校を訪問し、募金を頂いた時、6年生の子どもたちの顔は晴れやかで、自分たちにもできた!という達成感にあふれていました。何か役にたつことをしたい、と頑張っ



2月24日の朝会で全校生徒に今回の取り組みを発表する6年生



6年生担当の寺阪教諭

【アンパンマン】やなせたかし氏のまんがのヒーロー、アンパンマンは、空腹の者に自分の顔の顔をちぎって与える。やなせは「ほんとうの正義というものは、けつしてかっこうのいいものではないし、そしてそのためにかならず自分も深く傷つくものです」と第1作アンパンマンのおこがきで述べている。

（報告：吉本愛美）